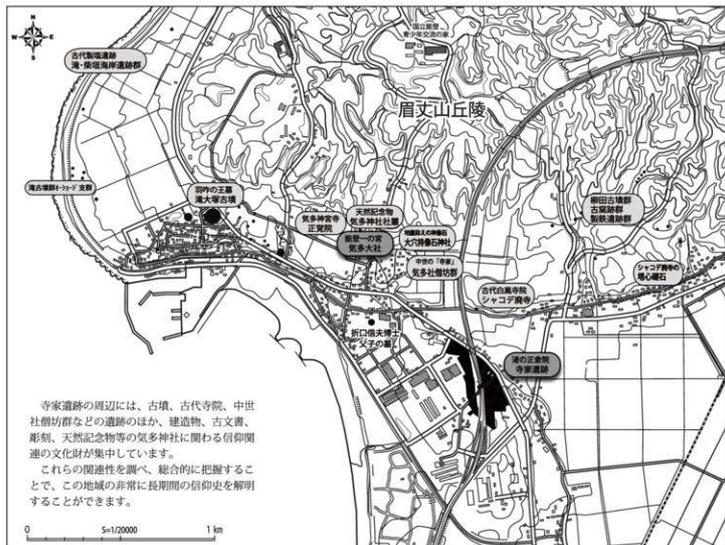


寺家遺跡と気多神社 周辺の関連文化財群



平成 30 年度 寺家遺跡整備基本計画策定事業 **パンフレット「価値編」**

史跡 寺家遺跡の価値を探る

国史跡寺家遺跡は、古代の神社とその神まつりに関連する重要な発見があった遺跡で、その発見当初から、古代から鎮座する能登国一宮「気多大社」との関わりが指摘されてきました。

遺跡から出土した国家的色彩の濃厚な出土品の性格から、この遺跡では、地方・地域の枠にとどまらない国家的な祭祀が行われていたと考えられています。この遺跡で発見された成果は、古代気多神社のようすの一端を教えてください。

寺家遺跡と気多神社の関係性を軸に、「祭祀・信仰」をキーワードとしたこの地域の歴史を紐解くことで、日本海交流の影響を受けた能登半島の入り口に位置する羽咋の歴史がみえてきます。



「入らずの森」気多神社遺跡 (国天然記念物)



気多神社拝殿 (国重文)



式内大穴持像石神社



海大塚古墳



正覺院 阿笈陀如来坐像 (国重文) と銅板打日出輪懸仏 (市指定)



シャコア廃寺の塔心礎石

羽咋市教育委員会

〒925-0027 石川県羽咋市鶴多町鶴多田 38-1
羽咋市歴史民俗資料館内 (文化財室) ☎0767-22-5998

寺家遺跡の発見と発掘調査

遺跡の発見と大規模発掘調査

1978年3月、金沢と能登をつなぐ「能登有料道路」を建設する工事のなかで遺跡が発見されました。石川県により、第1～3次調査の発掘調査が行われ、古代気多神社に関連する大規模な祭祀遺跡であることがわかりました。あいつつ発見により、連日の新聞報道がなされ、遺跡の保存が強く要望されていきました。県では、将来の史跡指定と整備・活用を視野に、重要な遺構については、工事の内容を一部変更して現地保存の措置がとられました。

寺家遺跡の調査は、当時の石川県では初めての経験となる道路建設に伴う大規模発掘調査でした。発掘作業には、多くの地元市民が参加し、羽咋の歴史の1ページを明らかにしてきました。

史跡指定にむけた発掘調査

石川県の調査終了後、羽咋市は史跡指定にむけた発掘調査を引き継ぎ、第19次調査まで行い、遺跡の範囲と主要な価値を明らかにしてきました。その学術的価値の重要性から、平成24年1月24日に史跡に指定され、寺家遺跡は国の文化財になりました。



能登有料道路（のと里山海道）建設に伴う発掘調査
（第1～3次調査 1978-1980 石川県）

寺家遺跡の学術的価値

①古代の神社と祭祀（神まつり）に関する遺構と遺物が総合的に備わっていること。

奈良・平安時代の気多神社が、国家の奉幣を受け、能登を筆頭する地方有力神社として、どのような組織・施設等をもって存在していたのか、その一端を知るための考古学的情報が豊富かつ総合的に備わっていることが重要です。

③自然史と考古学の観点から自然環境変化を考える「砂丘の遺跡」であること。

寺家遺跡は、日本海・砂丘・潟・丘陵が交差する特徴的な立地にあり、遺跡の発生から廃絶まで自然史と考古学の両面の研究から解説することが可能で、「風と砂」と生きた人々と環境変化の歴史を知ることができます。

②考古学的成果と文献史料の記述が時期的・内容的に整合性が高いこと。

古代の歴史書「六国史」に記載される気多神社に関連する記述は、寺家遺跡の考古学的成果と関連させて読み解くことが可能で、考古学と文献史学を往來しながら、より具体的な古代神社とその祭祀の様子を把握することができます。

④周辺文化財との関連性をもとに、現在に至る極めて長期の信仰史を把握可能なこと。

寺家遺跡と気多大社の関係を基軸に、周辺の関連遺跡や文化財の関連性を一体的に調べることで、古代から現在に至る、非常に長期間におよぶ、この地域の祈りと祭りの歴史（信仰史・文化史）を知ることができる点が重要です。

考古学的価値

自然史的価値

文献史的価値

地域史的価値

古代羽咋の自然環境とロケーション

古代能登の羽咋の位置づけ

能登半島の入り口に位置する羽咋は、古代から海を通じた交流が盛んで、海上交通によってもたらされる「人、モノ、情報」をいち早く受け入れる環境に恵まれていました。

日本海に突き出す眉丈山丘陵先端部の「滝崎」は、航海者たちにとって、羽咋の位置を教えてくれる絶好の航海標識であったと考えられます。海岸部に発達した長大な「海岸砂丘」は「邑知潟」を生み出し、潟の内水面は、外海の波浪の影響を受けない天然の良港（潟港）として機能しました。潟の周囲に広がる低地は、豊かな生産基盤となりました。

羽咋は、こうした環境のなか、長い歴史と文化を育んできました。弥生時代の能登に稲作文化と青銅器祭祀が伝わったことを伝える大拠点集落の「吉崎・次場遺跡」、能登最大級の「滝大塚古墳」、能登最古級の古代寺院のシャコテ庵寺、能登唯一宮「気多大社」など、能登を代表する文化財が数多く残されています。

能登は、古代の国家にとって、七尾の能登国府の先にある東北・北方世界、日本海を隔てた渤海国とも結ぶ地学的要地であり境界地域でした。能登の羽咋は古代から気多大社が鎮座したのは、国家の重要な港湾であり異世界との境界であるこの地の神を奉祭し鎮めるためであったと考えられます。



羽咋の主要遺跡と地理的環境（日本海から邑知地潟帯を望む）

能登国府が置かれた七尾には、古代北陸道の支道の幹路「能登路」が整備され、邑知潟の内水面交通とも接続する場所であったと考えられる。幹路には「越前」[備前]の駅家が配置されているが遺構は確認されていない。撰抄は羽咋市余部地区と羽咋市飯山町一宮連志水町杉野原の付近に求める2説がある。本図では従来の説を表示した。

古代寺家遺跡の世界

発掘調査により、寺家遺跡の古代の景観がわかってきました。8・9世紀の古代の気多神社が、どのような施設・組織をもって存在していたかの一端を教えてください。この考古学的成果は、文献史料に記される古代気多神社への厚遇措置や官社化の過程と時期的にも内容的にも整合性が高いことが重要です。豊富な祭祀遺物に加え、古代神社を支えた施設群や組織・人に関する情報が、ここまで総合的にわかっていく遺跡は、全国にも他に例がありません。

砂丘の遺跡



古代の砂丘地形（寺家遺跡包含層）の断面
下降して増積する黒色灰土層帯が包含層。その上部が遺跡を隔絶させた灰土砂丘層。（第18次調査）

黒色系の包含層の上部には、厚い表土砂丘が堆積しています。遺跡を埋め尽くすほどの大量の砂の供給と暴風による大規模な砂丘移動があったと考えられ、気候変動や環境変化の歴史も知ることができます。

祭祀地区

浅い凹地の砂丘地形のなかで、大規模な火を焚いた大型焼土遺構と多数の土器と祭祀遺物の集積遺構が集中して発見されたことから「祭祀地区」と呼ばれています。その空間的特殊性と内容から、遺跡のなかでも祭祀に深く関わる空間と考えられます。これには石組炉などの小規模炉を伴っており、祭祀で供献する神饌の調理も行われたと考えられます。



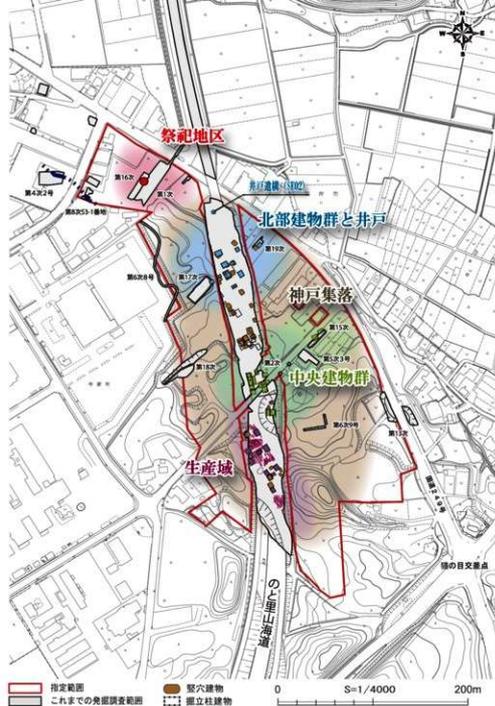
石組炉（内部に支脚）

大型焼土遺構
（8世紀後半 下層遺構面）



土器とともに出土した祭祀遺物

土器と祭具の集積遺構
（9世紀後半 上層遺構面）



生産域

9世紀代の製塩、鍛冶、帛あと（菜園）が集中して見つけられました。遺跡の南部は、神社の祭りを支える工房や菜園など生産の場となっていたと考えられます。9世紀には、神社施設と生産域が分業的に再編され、整備されたと考えられます。



畝溝状遺構（第3次調査）

祭祀専従集落「神戸のムラ」

8世紀前半の整穴建物集落が見つかりました。海獣葡萄乾・素文鏡・銅鈴などの多数の祭祀遺物のほかにガラスつづばも出土し、神社に属し、祭祀や生産活動に専従的に従事した「神戸（かんべ）」と呼ばれる人々の集落とみられます。史跡全域の広範囲に分布すると考えられますが、祭祀地区には分布しません。



検出された整穴建物

整穴建物出土祭祀遺物

「宮厨」と北部建物群 井戸遺構

9世紀前半の掘立柱建物群と多数の祭祀遺物が見つかりました。「宮厨」墨書から、祭祀の神饌や饗宴の準備などを行う厨（くりや）施設を伴う施設群と考えられます。

二重のせいろ組みで玉砂利を敷き詰めた重厚な井戸が見つかりました。ここでも「宮厨」墨書が出土しており、祭祀のための水を得る特別な井戸と考えられます。



北部建物群周辺出土の祭祀遺物

井戸遺構（SE02）

「宮司館」と中央建物群

9世紀後半の掘立柱建物跡群と多数の祭祀遺物が見つかりました。寺家遺跡で見つかった最大建物（SB01・2×9間）の付近から「宮」「司館」の墨書土器も出土し、宮司の館を伴う施設群と考えられます。



中央建物群の大型掘立柱建物（第2次調査）

「神」墨書と建物群

東側にも関連の施設が広がっています。墨書土器「神」と掘立柱建物が見つかりました。



掘立柱建物（第15次調査）

寺家遺跡と気多神社

古代年表

寺家遺跡のできごと
気多神社のできごと

8世紀	奈良時代
前半	整穴建物群の成立（祭祀専従集落「神戸」のムラ形成）
718年	能登国立国（第1次）
741年	能登国が越中国に併合される
748年	大伴家持が能登を巡行。「気多神宮」を参拜。（万葉集）
後半	神戸集落が掘立柱建物へ建て替え・再編 大型焼土遺構（祭祀地区）
757年	能登国立国（第2次）
765年	気多神に封戸10座を奉充。（氣比志麻呂日記）
768年	神戸神に封戸20戸・田2町を奉充。（日本後紀）
770年	神饌平定神のため気多神に奉使。（日本後紀）
784年	気多神の神階が正三位に叙される。（日本後紀）
9世紀	平安時代
前半	「宮厨」を備える北部建物群・井戸遺構が成立。 生産域（鍛冶・鍛冶・木工）、官社化による整備と生産体制の分業化が進む。
804年	気多宮司の選任は神祇官の検校とする（日本後紀）
804年	増加する沿海部の安寧のため能登官院の造立が命じられる
806年	気多神の神封30戸（新抄秘教符抄）
834年	神戸の権宜と初に把節物を許す（続日本後紀）
後半	「宮厨」を備える中央建物群・生産域（菜園）が成立。 土器供具類と祭具の奉獻祭祀。官社化のピーク。
850年	気多神の神階が従二位に昇叙（文徳天皇実録）
853年	気多神に封戸10間と位田2町を加増（文徳天皇実録）
855年	気多神宮寺に新住僧3人を置き得度を得許す（文徳天皇実録）
859年	気多神の神階が従一位に昇叙（日本三代実録）
859年	氣比・気多両社に奉使使（日本三代実録）
868年	気多社で金剛般若経が読誦される（日本後紀）
9c末 - 10c初	砂丘移動により遺跡の大半が砂埋没。

「なぎさの正倉院」のたからもの

寺家遺跡は、別名「なぎさの正倉院」とも呼ばれています。遺跡がある海岸砂丘の地中から、国家的色彩の濃厚な古代の神まつりの道具が豊富に出土しました。地方でこれだけの点数の律令祭祀遺物が一括して発見された例は無く、古代の神社や祭祀の実態を研究するうえで学術的に重要です。これらが、砂丘の厚い表土の下に良好な状態で埋もれ、保存されていることから、奈良の正倉院になぞらえて名づけられました。

三彩



三彩陶器 (さんさいとうき)

三彩とは、黄色や緑色のうわぐすりがかげられた奈良時代の色鮮やかな陶器です。都の周辺で生産され、羽咋まで持ち込まれたものです。地方では、古代寺院や役所施設など、ごく限られた遺跡でしか出土しない貴重品です。

緑釉



緑釉平瓶 (りょくゆうひらか)

緑色系のうわぐすりがかけられた古代の陶器で、三彩陶器と同様に貴重品です。水差しのような形状をした「平瓶(ひらか)」という器で、これだけ大型で緑釉によるものは珍しく貴重です。神まつりに使用する清浄な水や、その後の直会などの饗宴で使用する酒などを入れたと考えられます。

古代ガラス



ガラスるつぼ

るつぼとは、金属などを熱して溶かすための耐熱性容器を言います。神戸(かんべ)集落の竪穴建物から出土しました。ガラスを溶かすためのるつぼで、復元すると右図のような砲弾型になります。内面には溶けた淡い緑のガラスが付着して残っています。



平城京出土のガラスるつぼ

奈良・平安時代では、ガラス生産は都とその周辺地域の官営工房で行われ、地方では生産できないものでした。北陸能登の寺家遺跡で出土したことは異例と言うべき重要な資料です。この資料から、古代の寺家遺跡が当時の国家と深い関わりを持ち、古代気多神社の祭祀の準備などに従事した神戸(かんべ)たちが、ガラス生産にも関わっていたと考えられます。

土馬



土馬 (どば)

土で作られた馬の頭部の破片です。奈良・平安時代では、雨ごいなどの祈りを込めて使用されたと考えられています。

銅鏡



銅鏡・直刀・勾玉 (どうきょう・ちよくとう・まがたま)

銅鏡・直刀・勾玉は、神まつりには欠かせない道具です。銅鏡は、空想上の動物を文様とした「海獸葡萄鏡」「瓊瓊鏡」のほかに、文様のない小型の「素文鏡」も多数出土しています。銅鏡のほか「鉄鏡」もあります。素文鏡の紐に櫛り紐が残存するものもあり、吊るして使用していたようです。直刀は、全長約60cmの鉄製の刀で、刀装具も出土していることから、拵えを備えたものであったと考えられます。勾玉は、メノウ・滑石製のものがあり、赤玉とよばれる濃い赤褐色のものは、磨きも顕著で優品です。これらは、古代気多神社の神まつりに使用され、奉獻されたものと考えられます。

墨書



帯金具 瓊瓊 銅鈴

さまざまな祭りの道具

金製の鈴や瓊瓊(飾り金具)、装束の帯金具など、神まつりに使用し、奉獻したとみられる多彩な道具が多数出土しました。きらびやかに荘厳された空間と清らかな鈴音のなか、神まつりが行われていた様子がうかがわれます。

墨書土器 (ぼくしょどき)

墨で文字が書かれた土器を「墨書土器」といいます。これらの文字は、遺跡の性格を解明する重要な手がかりになります。「神」「宮」「司」「可願」「宮厨」などの文字が書かれており、寺家遺跡が古代の神社とその神まつりに深く関わり、これをつかさどる神職や施設が存在していたことを伝えています。